

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：34303

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520969

研究課題名(和文)都市空間における神話的特性の変容過程に関する歴史地理学的研究

研究課題名(英文)Historical geography of mythological character in urban space

研究代表者

佐々木 高弘(Sasaki, Takahiro)

京都学園大学・人間文化学部・教授

研究者番号：20205850

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、都市空間における物理的側面と精神的側面の関係史を探ることを目的としている。選ばれた都市は、京都、大阪、東京、名古屋、金沢、姫路、高知、鳥取である。これら都市は物理的に古代から近世まで都市的性格を持っていた。これら都市の物理的側面は、歴史地理学の研究成果から、精神的側面はこれら都市が持つ、神話的伝承から見た。

結果、いずれの都市も古代の街道沿いに神話的伝承が分布していること、そしてそれら分布は平安京との関係があることも。これら近世の諸都市は古代都市とは異なる物理的特性を有しているが、精神的には古代的世界観を継承していることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)： In this research, I will try to investigate the historical relationships between physical and mental aspect of the city. Selected cities in this research were Kyoto(Heian-kyo), Osaka, Tokyo, Nagoya, Kanazawa, Himeji, Kouchi, Tottori. These selected cities which built in early modern period have inherited physical characteristic of ancient times. We can see these urban physical characteristics from the study of traditional historical geography. However about these urban mental characteristics, probably we can know something from mythological documents or narratives which these cities have.

As a result, these mythological ones are found along the main ancient road of the city. And it was also known that these distribution was linked with road network of Heian-kyo. Though these early modern cities have different physical characteristics from ancient cities, it was cleared that these cities have succeeded to ancient mental aspects.

研究分野：人文地理学

キーワード：環境知覚研究 歴史地理学 近世城下町 古代都市 神話的伝承

### 1. 研究開始当初の背景

本研究が資料とする都市の神話的伝承とは、庶民を中心に展開してきた大衆文化も含まれ、そこで語られる物語には、当時の都市に住む商人や職人の価値観や世界観が表象されている。そのような伝承においては、当時の支配階層である将軍や貴族や武士ではなく、支配される側の視点から見た、京都、大坂、江戸といった近世都市の姿がそこに描かれていることになる。その意味で、本研究を、欧米における白人でなく、男性でもなく、さらにエリートでもない、いわゆるこれまで焦点を当てられなかった都市住民、「他者の文化」を研究する、カルチュラルスタディーズ (Jackson, P. 1989.) や、その後、支配、被支配の関係ではなく、消費文化と文化的アイデンティティに焦点を当てた、カルチュラル・ターンの影響を受けた新しい文化地理学に位置づけることができる (Scott, H. 2004)。

またこれら神話的伝承は、口承文芸の一つとして位置づけられ、昔話や伝説とのつながりも指摘されてきた (柳田、1935)。筆者はこれまで、口頭伝承のうち伝説・昔話・神話で語られた場所に、どのように伝承者たちの場所認識が表象されているのかを、人文主義地理学や環境知覚研究の視点から研究してきた (佐々木、2003)。多くの場合、これら口頭伝承は、語られた時代の特定は難しく、農村地域の伝統的な社会組織において、不特定の人たちによって語られるものであった。それに対して、本研究で対象とする都市の神話的伝承は、古代から近世にかけて、特定の都市、例えば京都、大坂、江戸で誕生し特定の集団によって口頭伝承されてきた。このように都市の神話的伝承は口承文芸の系譜を持ちながら、時代と語り手、受容者、そしてその舞台が特定の都市に限定できる点が、これまで扱ってきた口頭伝承との違いである。このように都市の神話的伝承を口承文芸の一形態と考えることによって、これまで研究

代表者が行ってきた、民間説話の場所研究の延長線上に置くことが可能となり、これらに描かれた場所表現の比較研究から、両者の相違点を明らかにすることが出来るとも考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究で対象とする都市空間における神話的特性とは、人類が築き上げた都市という実在的空間に、少なからずそのプランニングの段階から介入し、更に、その後も居住者に長きにわたって様々な影響を与えてきた、生活空間における神話的側面を意味している。

本研究では、その私たち都市住民に影響を与えてきた、都市の神話的特性を、様々な記録や伝承、あるいは物語を手がかりに、探り出そうと試みるものである。

たとえば、京都は日本において、最も古い都市としての過去と、今なお繁栄する現在とを保持している。京都には平安時代からの様々な神話的記録や伝承が残されている。ここで言う、都市の神話的伝承とは、口頭あるいは様々な文献にも記されてきた、権力者や宗教者、侍や町人、商人や農家の、あるいは寺社、祠、自然物である塚や森についての、また様々な動物や鬼等の怪異・妖怪にまつわる伝承を総称している。

研究論題にもあるように、これら都市に蓄積されてきた資料を、その都市の変容過程とともに歴史地理学的に探求するのが本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

上記のような研究にとりかかるには、まずは文献あるいは伝承から、神話的出来事の、出現したとされる場所を抽出し、その出現があったとされる時代の場所が、どのような性質のものであったのかを、復原することからはじめなければならない。このような場所の復原作業には、歴史地理学の研究方法が有効である。

歴史地理学は、過去のあらゆる文化が、人間と環境の相互関係から生まれた点を、強く意識して研究する地理学の一分野である。したがって神話的伝承についても、それを語り所有する人たちと、その周囲の場所や環境との関係に注目することになる。

また歴史地理学は、文献資料、考古資料、口頭伝承を広く扱うが、研究領域も三つあるとされる (Prince, H.C, 1971.)。一つは、過去の現実世界の復原である。ここでは、文献資料や考古資料によって、出来るだけ忠実に過去の地理を復原することを目的としている。例えば、江戸時代に描かれた絵図や文献記録、あるいは発掘された遺構等から、江戸時代の城下町や村落景観を復原する研究である。

二つ目は、過去の人たちが抱いていた、イメージ世界の研究である。私たちの地理的行動の根幹には、豊かな空想世界が広がっている。例えば、平安京は風水思想に基づいて建造された古代都市であるが、その背後には壮大な龍の気が流れるとされる、龍脈という空想世界が横たわっている。神話的伝承資料も、この分野に入るだろう。

三つ目には、私たち人類に普遍的に存在するであろう、抽象的概念の空間的表現について、諸分野の成果や方法論を駆使して行う研究領域である。例えば、さまざまな文化や時代に通底する、都市における中心と周縁のパターンや形態を見いだすのに、社会学や経済学の方法論を使い、あるいは垂直空間や方位観のシンボリズムなどの空間に関する抽象的概念を、文化人類学や心理学、あるいは言語学などの成果を見渡して研究する。

本研究がめざすのは、このイメージ世界と抽象世界の歴史地理学的研究ということになる。これら三つの研究領域、あるいは様々な形態の資料を組み合わせることによって、神話的伝承をめぐる人々と環境(都市)の関係が、多様な角度から浮かび上がってくるだ

らう。

#### 4. 研究成果

近世の都市で語られ伝承されてきた神話的物語の場所性に注目することによって、そこに古代的な神話世界が介入していることが指摘できる。本研究で取りあげた記録を、一つ一つ見ていけば、ある侍、ある町人、ある商人が、あるとき偶然遭遇した怪異・妖怪の体験談にしか思えない。しかし、これらを集合体として城下町絵図等で分布図を作成してみたとき、そこに何らかの傾向が見えてくるのが、数多くの都市で示すことによって浮かび上がってくる(佐々木 2015)。

本研究の当初の計画では、東北、関東、北陸、東海、近畿、中国、四国、九州地方の城下町を一つずつ選んで、その江戸時代の怪異・妖怪を中心とした記録を抽出することによって、何らかの傾向を見いだすつもりであった。ところがすべての城下町にこのような記録が残っているわけではなく、むしろ残っている記録を優先して、都市を選ぶこととなった。その結果が、報告書(佐々木 2015)で示した、名古屋、鳥取、姫路、高知、金沢、大聖寺だった。もちろんその他にも東北では弘前なども調査をした。また九州ではなかなか適当な城下町と神話的記録の抽出ができなかった。

しかしながら、これまでも指摘してきた平安京を中心とした古代的な神話的世界という設定を仮想してみたとき、ランダムに集めたつもりのこれら記録と城下町が、それぞれの古代から近世にかけての主要街道沿いにあることがわかってきた。まだまだ調査をしつくしたわけではないが、あるべき都市にあるべき伝承が記録されていたのではないかと考えている。

さて、先の個人の体験談やその家の伝承でありながら、実はもっと古代的な場所の何かが人々をして語らしめていたのではないかと、という点を示すことが、何らかの理論で説明

できないだろうか。その意味で最も注目すべき記録として『尾張霊異記』二篇下の第1話をあげたい。本話については、(佐々木2015)、380頁を参照してほしい。あるいは同書の第2部の実践編では全文を掲載しているので見てほしい(113~122頁)。この記録は、天保4(1833)年10月~12月29日までのもので、古渡村の箕浦領八郎の子供である虎之助が体験した神話的怪異体験の記録である。それは神々が、時には夢に、時には現実に、特定の場所にあられ、屋敷内に白髪(髭)大明神の祠を建てるようにと告げた、何ヶ月にもわたる、現実に即したきわめて忠実な記録である。

記録をつけた父、箕浦領八郎が「右に付領八郎思ふ様、霊夢と言も、往昔は邂逅有様に聞伝へ候得共、今世に誠の霊夢有事を一向不聞、殊に召仕つきが申趣も分明ならず候得共、今世にても小児は正直律儀なる者故、若や神託のあらん事もと思ひ、先々地所取究、注連等を張置申けり」と記しているように、小さな子供であるから嘘はつかないだろう、ということでもしかしたら本当にご神託かもしれない、としている。つまり疑いつつも、大人ではなく年端もいかぬ子供であるから信じてみようということになる。

しかしながら、このきわめて個人に属する、しかも経験も知識もない、いわば何ら地位を得ようとしたり、金を儲けたりしようとする策略もない子供の夢や体験談が、その場所性を見れば、きわめて意図的である点が、明らかとなるのである。その場所性については先に述べたが、この古渡村が城下の南に接し衝的性格を有しており、現れた神の一人が白髭大明神で、調べてみると天の八衢に現れたとされる猿田彦であった点である。作為的でないのなら、一体なにがこの子供に語らせたのであろう。

フランスの心理学者のラカンが、私たちの無意識の語りには、自身の語りだけでなく、

他者の言語が入り込んでいることを、「他者のディスクール」という表現で示している(ブルース・フィンク、2013)。ここでいうディスクールとは、いわば文化的なパターンのようなもので、私たちは時に、お決まりのせりふを、知らないうちに発しているという。特にそれが通常の会話で言い間違いをしたときに出ると言う。

私たちは怪異を体験しても、あまり人には言えない。なぜなら間違いであるかもしれないし、そのようなことを言えば、変人あるいは狂人として見られてしまう可能性があるからだ。しかしながら、その体験を受け入れてくれるような集団であれば、語ることもあろう。場合によっては記録すべきこととして記されることもあろう。そのような集団とは、いわば同じような体験をしたことがある人たち、ということになるだろうか。であるならこの伝承の場合、この子供が体験したことを、この古渡村の侍は、その話を真摯に聞き記録したのであるから、彼もまた、そのような体験をし、あるいは、そのような話を何らかの理由で受け入れる集団の一員だった、ということになるだろうか。

そしてそのような集団の一員は、いわば彼らのディスクールを所有していたことになる。その正体を明らかにすることはできないが、私はあえて「平安京のディスクール」と呼んでおきたい。つまりこの子供は無意識的に、ある意味では現実には起こりえない、間違った話を、名古屋城下町の南端で、お決まりのあの都市の神話的特性を有した「平安京のディスクール」を語っていたのではないか。それは近世名古屋城下町の無意識だったのではないか。

それはここで見てきた、鳥取、姫路、高知、金沢、大聖寺でも同じだったのではないか。であるなら、今の私たちも、あの「平安京のディスクール」をどこかで無意識的に語っているのかもしれない。でなければ現在のよう

な近代科学が発展した日本社会で、怪異や妖怪ブームが起こるはずがないのではないか。

<引用文献>

佐々木高弘『民話の地理学』古今書院、2003。

佐々木高弘『都市空間における神話的特性の変容過程に関する歴史地理学的研究』（平成23～26年度科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号23520969 研究成果報告書）京都学園大学、2015。

ブルース・フィンク『後期ラカン入門 ラカンの主体について』人文書院、2013。

柳田国男『日本口承文芸史考』（『柳田国男全集』第8巻所収、筑摩書房）1935。

Jackson, P. *Maps of Meanings: An introduction to cultural geography*, Unwin Hyman, 1989.

Prince, H.C, Real, imagined and abstract worlds of the past, *Progress in Geography*3, 1971, p.1-86.

Scott, H.' Cultural Turns' , In Duncan, J.S., Johnson, N.C.& Schein, R.H. ed. *A Companion to Cultural Geography*, Blackwell, 2004, 24-37.

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計14件)

佐々木高弘、『備後国風土記』逸文の蘇民将来と茅の輪、怪43号、2014年、222～226頁、査読なし。

佐々木高弘、神話・物語の力、子どもの文化2014 10、2014、2～8頁、査読なし。

佐々木高弘、「首切れ馬」の走る場所 徳島県板野町の伝承から、怪42号、2014年、270～271、査読なし。

佐々木高弘、上方の歴史地理と怪異 綱がつなく京と大阪、怪41号、2014年、244～247頁、査読なし。

佐々木高弘、怪異・妖怪の出没地を歩く 神話的世界観と古地図・絵巻から見えてくる、京の魔界、月刊京都8月号、2013年、14～18頁、査読なし。

佐々木高弘、二人の旅人 神話・昔話・落語の旅と怪異、怪39号（角川書店）、2013年、218～221頁、査読なし。

佐々木高弘、多田源氏と丹波国の妖怪伝承 サムライの精神的レトリックの誕生、人間文化研究 第30号、2013年、5～31頁、査読なし。

佐々木高弘、星座の伝承と古代都市、怪36号、2012年、274～277頁、査読なし。

佐々木高弘、蛇とのまぐはひ、怪35、2012年、278～279頁、査読なし。

佐々木高弘、風土と妖怪 徳島県吉野川流域の風土と首切れ馬、歴博170号、2012年、10～14頁、査読なし。

佐々木高弘、民話の歴史地理学、月刊地球33巻11号、2011年、691～695頁、査読なし。

佐々木高弘、土蜘蛛はいずこ？、子どもの文化2011 7+8、2011年、132～141頁、査読なし。

佐々木高弘、ぼ、ぼ、ぼくらは妖怪探検隊 探検の準備編、子どもの文化2011 7+8、2011年、104～113頁、査読なし。

佐々木高弘、神話に描かれた虫たち、怪33号、2011年、38～41頁、査読なし。

〔学会発表〕(計4件)

佐々木高弘、『尾張霊異記』の怪異・妖怪

と名古屋城下町、国際日本文化研究センター・シンポジウム「怪異・妖怪文化研究の現在」、2015年1月10日、国際日本文化研究センター（京都市）

佐々木高弘、怪異・妖界の場所論、東アジア怪異学会第87回定例研究会、2013年9月22日、関西学院大学梅田キャンパス(大阪府)

佐々木高弘、重層的で円環的な神話空間、第23回日本宗教民俗学会シンポジウム「円環する祈り」、2013年6月8日、大谷大学（京都市）

佐々木高弘、『聖城怪談録』と「大聖寺町絵図」、共同研究：「怪異・妖怪文化の伝統と創造 研究のさらなる飛躍に向けて」第4回研究会、2012年5月7日、国際日本文化研究センター(京都市)

〔図書〕(計7件)

佐々木高弘、都市空間における神話的特性の変容過程に関する歴史地理学的研究、2015年、平成23年度～26年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書、京都学園大学、A4版389頁。

佐々木高弘、神話の風景(シリーズ妖怪文化の民俗地理3)、2014年、古今書院、四六版228頁。

佐々木高弘、怪異の風景学(シリーズ妖怪文化の民俗地理2)、2014年、古今書院、四六版220頁。

佐々木高弘、民話の地理学(シリーズ妖怪文化の民俗地理1)、2014年、古今書院、四六版252頁。

佐々木高弘、かが風土記 見て、歩いて、学ぶ旅 加賀市総合民俗調査報告書(共著：

「第1章 城下町と妖怪」27～90頁、「第3章 加賀東谷の民俗をめぐる山岳エコツアー」133～164頁、担当)、2013年、加賀市教育委員会事務局文化課編集、加賀市。

佐々木高弘、京都妖界案内、2012年、大和書房、文庫版237頁。

佐々木高弘、妖怪学の基礎知識(共著：章「妖怪の出現する場所」141～167頁、担当)2011年、角川学芸出版

〔産業財産権〕  
出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
全国妖界案内(<http://kaidangeo.seesaa.net/>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木高弘(Sasaki Takahiro)  
京都学園大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：20205850

(2) 研究分担者

( )  
研究者番号：

(3) 連携研究者

( )  
研究者番号：